

## 父、山本弘について

山本正弘



十三年間、西小学校に在籍したのち、大八中学校の教頭を務め、県教育委員会の指導主事となり、それまで抱えていた音楽教育の在り方に問題提起をした。

父は、大正六年東京都世田谷区に生まれ、二歳の時母親を亡くし、父親の手で育てられた。静岡県、滋賀県を経て大正十二年に高山市に移住した。

昭和十二年、岐阜県師範学校を卒業し、益田郡下呂小学校を振り出しに高山市立西小学校で長年教鞭をとった。この間、中村好明先生とともに音楽教育に励み、子供たちを育ててきた。転機になったのが東京芸術大学の松本講習会で、これに参加したことがきっかけになり、「ふしづくり一本道」へ歩みだすことになる。

(編注)「ふしづくり」とは、山本弘氏、中村好明氏らが提唱、実践した音楽教育の指導法の名称。「一本道」は、その指導段階表のこと。

父は、他教科は六年生になればそれなりに力がついて複雑な漢字が書けたり難しい文章題などが解けたりするのに、何故、音楽だけは楽譜も読めず覚えるのに時間がかかるのだろうかという疑問にぶつかっていた。

そうした音楽科の状況を打破するため、県下のいくつかの学校を指定して「ふしづくり」を取り入れた授業を実践していった。温知小学校、保小学校などを経て、古川小学校で十年以上の実践を行った。その成果による子供たちの実力は素晴らしいものがあり、全国からバスで学校見学に三千人以上訪れたという記録がある。

子供たちは授業になると自分で計画を立て(勿論先生と打合せはしているが)、自分

たちで授業を進めていく。その中身も実際に音楽で演奏しながら聴き合い、教科書の曲を自分たちで伴奏を付けて、演奏の中身について評論していった。勿論、自分たちで作曲した曲もリズム伴奏やピアノ伴奏を付けたりして楽しんでいった。すべての児童が自作の曲を発表していた。

年に一回ほど発表会があるときには、学年ごとに自分たちの作曲した二十分から五十分ほどの長い曲をオペラ仕立てで演奏する姿も見られた。そこでの発表が特に参観者には魅力となっていたようだ。

そうした能力を付けられたのは、父が理論立てて中村好明先生が実践するというタッグがあればこそだと思われる。それらの実践から得られた内容をもとに、昭和四十三年に明治図書から『音楽教育の診断と体質改善―音楽能力表とふしづくり一本道―』と

いう本を出し、昭和四十八年には『音楽教育を子どももの』を出版した。平成十二年にも『授業』という本を文芸社から出版しており、退職してからも後輩の指導に打ち込んでいた。



古川小 ふしづくり一本道発表



師範学校時代「荒城の月」を披露する父と中村先生

その他にも、昭和三十七年の全国唱和ラジオコンクール(現NHK全国学校音楽コンクール)の高校の部・課題曲に父の作曲した「若き神々の歌」が採用され、その賞金で当時高かったテレビを買ってもらい、嬉しかった記憶がある。また、各地の学校の校歌を作曲しており、学校を訪問すると父の名前を見つけて誇りに思ったりしたものである。

家でも全国の先生方と教育について手紙をやりとりして、常に音楽教育の方向を探っていた姿が見られた。

平成十七年二月一日没。